

狙われたシーズン

紫 李鳥

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

台風13号は九州北部を直撃し、土砂崩れを起こした現場から遺体が発見された。

目次

3	2	1
9	5	1

台風13号は、九州北部を直撃した。――

「はい。予約の電話はあったのですが、いらつしやいませんでした」
老舗旅館、〈静風〉の女将、狩野日斗美は、聞き込みに来た藤堂に不可解な顔を向けた。

「本人からん電話ね？」

「と思います。金田猛かねだたけしやおっしやってましたから」

「一人ね？」

「いいえ。2名になってます」

30代前半だろうか、深緑の付け下げに黄金色の袋帯をした日斗美は、袖口から出した細い人差し指を予約者名簿に置いた。

藤堂は、メモを取っている相棒の吉岡よしおかと目を合わせると、慚然ぶぜんとした。

「連絡先になつてる携帯に電話したんですが、何度電話しても出なくて。――」

猛威もういを振るつた台風13号は、大きな爪痕を残し、死者2名、行方不明者3名を出した。

3日後、〈静風〉から程近い土砂崩れを起こした山道から金田の遺体が発見された。死因は脳挫傷のうざしやう。崖から滑り落ちた時の傷と見られ、台風による事故死ということで決着した。

だが、藤堂は納得していなかった。予約では二人となっていた。もう一人は誰だ？それに、台風が直撃しているのになぜ、わざわざ旅館まで歩きで行ったんだ？普通ならタクシーを使うか、もしくはキャンセルするはずだ。

藤堂は、金田の身边を調べることにした。元右翼の金田猛(42)は無職で、東京の町田に住んでいた。近所の話によると、挨拶どころか、

ろくに口も利かなかったとのことだった。

「——なんだか、胡散臭い人でしたよ。昼間からウロチョロしてて。目付きが怖くて、誰も近寄りませんよ」

隣部屋の主婦は顔をしかめた。

「越してきたのは最近ですか?」

「いえ、2年近くになりますかしら。それまでは新宿に居たって聞きましたけど」

「一人住まいでしたか」

「住んでたのは一人でしたが、昼夜構わず人の出入りがありましたね。何か悪い組織のアジトかしら、なんて主人と話してたんですよ」

「出入りするの男だけ?」

「いえ、女の人も何人が居ました。昼間からいやらしい声がしてましたもん。ホステスか売春婦じゃないですかね」

「顔とか見ましたか」

「ええ、何度となく。私が知ってるのは4〜5人ですかね。皆、20代の似たようなタイプで、派手な服に、きんきらきんのアクセサリーをチャラチャラさせてました」

(20代か……)

見当をつけた回答ではなかったことに、藤堂は意気消沈した。

藤堂は町田署と合流すると、金田の前住所の新宿に赴いた。——だが、聞き込みの結果は、町田での情報収集と然程の違いはなかった。新宿のマンションを引き払ったのは、家賃滞納が理由の夜逃げだった。転居先がなぜ町田なのかは不明だった。また、生活費は情婦からのピンはねやパチンコ、麻雀や競馬などのギャンブルで稼いだ金を充てていたことが、金田をよく知るパチンコ店の店員からの情報で判明した。

金田の関係者や、情婦とされる数名を取り調べたが、×日に九州に行った形跡はなかった。

……つたく、予約の連れというのは、女なのか男なのか?それと、金田の死は事故なのか事件なのか、どっちなんだ?

折角上京したにもかかわらず徒労に終わった藤堂は、悔しがりながらも「殺し」とする刑事の勘を払拭できなかつた。

最初からやり直すつもりで、もう一遍、〈静風〉の女将から話を訊くことにした。

日斗美は、「和服の似合う美人女将」という宣伝文句どおりに、前回同様、老舗の旅館に威厳と華を添えていた。

ところが、藤堂と目が合った途端、嫣然とした表情から一変して、顔を強張らせた。

……どうしたんだ？ 余裕綽々といった具合に、平然と受け答えをしていた前回とは別人のようだ。

だが、日斗美はすぐに表情を変え、作り笑いをすると、お辞儀をした。

「——失礼ですが、こちらにいらつしやる前はどちらに？」

単刀直入に訊いた。

「新宿です。東京の」

日斗美は覚悟を決めたかのように即答した。

「金田猛はご存じでしたか？」

「いいえ」

日斗美は、瞬き一つない目で見た。その目はまるで、ボロを出すまいと、必死に踏ん張っているように見えた。

(日斗美は金田と面識がある)

藤堂は直感した。

「新宿では何を？」

「歌舞伎町の〈アンジユ〉というクラブに勤めていました」

明確に物を言う日斗美の、膝に載せた両手はギュツと握られていた。それはまるで、僅かでも力を抜くと震えてしまうことを知った上での身構えのように藤堂には思えた。

「当時のお住まいは？」

「大久保通りにある、〈コーポ星野〉です」

「こちらにいらしたのはいつですか」

「2年前です」

(！……2年前？金田がまだ新宿に居た頃だ。益々、金田との繋がりが濃厚になった。さて、どうする。もう一度上京して、日斗美の当時間を調べるか……)

藤堂は、硬直した日斗美の体をほぐしてやるかのように腰を上げた。途端、ホツと息を抜く音と共に、ドンと肩の荷を下ろす音が、テールを挟んだ日斗美の方から聞こえた気がした。

「あつ！台風の×日、何をなさってました？」

藤堂は振り向き様に、鋭い眼光を放った。

不意打ちに遭って吃驚びっくりしたのか、日斗美はギョツとした目を見上げた。

「え？ああ、一日中接客をしてました。前日から泊まっているお客様もおられましたので」

「……そうでしたか？では、失礼します」

藤堂のその言葉が終わると同時に、日斗美は結んでいた口を横にほどいた。

日斗美の言ったことは本当だろう。従業員や客と口裏を合わせるには、余程の頑丈な基盤いくだうおんが要る。寸分の違いもなく異口同音にするのは至難の業わざだ。ましてや、台風の最中さなかに外出するはずもない。やはり、金田は事故死なのだろうか……。

藤堂は、白髪まじりの洗いっぱなしの頭を掻いた。

再び上京し、日斗美が働いていたクラブや住んでいたマンションの隣人に話を訊いたが、当時の住人はおらず、結局、金田との接点を立証することはできなかった。

うむ……、俺の“刑事の勘”て言う奴も鈍ってきたか。そんなふう
に結論付けながらも、胃もたれのようにスッキリしない胃袋には、まだ消化ざんしされていない残滓ざんしがあった。

翌日、肝心なことを忘れていたのに気付いた。度外視していた金田の出身地だ。藤堂の頭にあった、“旅行客”というのが、金田を長崎以外の出身にしていたのだ。調べた結果、案の定、金田の出身地は長崎だった。それも、5年前まで住んでいた。つまり、5年前に上京したことになる。

金田をよく知る暴力団の組長、堀内信也ほりうちしんやから話を訊いた。

「——右翼ばやってた頃は羽振りもよく、女も2〜3人おったごたあ」
革のソファにどっしりと体を沈めた堀内は、舎弟の点けたライター

の火に煙草の先を向けた。

「なして東京に行つたと？」

「金策たい。右翼ん頃、金ば使いすぎてからに事務所ば閉めたばつてんが、生活に困るまでになつて。ギャンブルで稼いだつちや高が知れとつたい。右翼を諦め切れんかつたとやろ。東京の町田に住んどる右翼の知り合いに会いに行つたとばつてんが、思うように工面できんかつたらしか。何度となく電話ばもろて、そげん言うちよつた。――」

なるほど。それで町田か。だが、その前に新宿に住んでいる。

「――右翼の知り合いはあつちこつちにおるけんで、手伝いばしながら、再出発の資金稼ぎばしとつたとやろ」

なるほど。新宿にも右翼の知人が居たのか。

「金田の女だが、顔ば見たら分かるね？」

「よか女ばつかやつたけんで、見たら分かるばい」

堀内は含み笑いをした。

だが、日斗美の顔写真に堀内は首を横に振つた。

つたく。どこで繋がっているんだ、日斗美と金田は。それとも、全く関わりがないのかな？あー、さっぱり分からん。だが、どうしても、藤堂の中の「刑事の勘」と言う奴が、日斗美と金田を結び付けていた。

そこで、「現場百遍」を試みた。土砂崩れを起こした現場には、傾いた家屋があつた。

廃屋か。なんでわざわざこんな山道を通つたんだろう……。

ガタツガタツ！

人一人入れるほどの戸口をもう少し開けようと手を置いたが、歪んだ枠に挟まつた戸はびくともしなかつた。横向きで入ると、日当たりが悪いせいか、じめつとした空気が覆つた。

ガラスが割れた窓からは、なぎ倒された木の枝葉が見えた。土間の竈かまどは泥を被り、板の間の板は反り上がっていた。

この時、ふと思つた。もしかして、金田はこの家に居たのではない

かど。なんのために？あめかぜ雨風を凌しのぐためにだ。だが、土砂崩れが起きて、反射的に外に飛び出した。そして、災難に遭った。……こうなったら、鎌をかけるか。

再度の聞き込みにうんざりするかのようには、日斗美は藤堂の顔を見るなり笑顔を消した。

「――金田を知る人が、あなたと金田の関係を喋喋つてくれましたよ」
その作り話に、日斗美は目を見開いた。

「金田猛を知っていますよね？」
藤堂は顔を近づけると、フロントに聞こえないように低い声で言った。

目を伏せたままの日斗美は、短い沈黙の後に徐おもむろに頷うなずいた。

「――新宿のクラブで働いていた時、他のお客さんの連れだった金田と知り合いました。けど、金田は一度しか来なかつたので、店側も、顔も名前も覚えてないはずです。私もヘルプで一度ついただけなので、金田との関係は誰にも知られることはありませんでした。

金田に口説かれた私は、一年ほど付き合っていた彼と別れたばかりの寂しさもあり、電話番号を教えました。それから、部屋に来るようになり、恋人気分でした。金田はおしやれで、話も面白くて、私を夢中にしました。

……けど、間もなく本性を現しました。会う度に金を要求してきたんです。金田の目的は金だと知った私は、店を辞め、マンションを引き払うと逃げるように長崎に来ました。その時、数日泊まった「静風」の主人に見初みそめられ、結婚しました。

そんな時、「老舗旅館の美人女将」という特集番組に出演してほしいと、テレビ局からの依頼がありました。テレビはまずい。金田が観ている可能性がある。

しかし、客を増やしたかった私は、金田が裏番組の野球中継を観る確率に賭けました。ところが、特集が放送される日、雨で野球が中止になってしまったんです。

不安と恐怖で、私の頭は真っ白になりました。野球がない時は、金田は決まって、特集番組やドキュメンタリーを観ることを知っていたからです。

もし、強請^{ゆす}つてきたら、逆に貶^{おとし}めてやろう。それでも効果がない時は、主人と離婚して、この旅館から出ていけば済むことだ。

私は覚悟をすると、開き直りました。そして、予想どおりに金田から電話が来ました。

『——ヒトミちゃん、ジャジャジャジャン。遅くなってごめんね。君を捜していたんだよ。やつと見付けた。マンションにも居ないし、携帯に電話しても現在使われておりませんだし。どちらのようになって、僕、心配しちゃった。長崎に行くなら、そう言ってよ。僕が観光スポットを案内してあげたのに』

あの頃のように、ジョークまじりのゆすりが始まりました。私が黙っていると、

『どちらなの？なんかちやべってえ。僕、聞こえない』

と、尚もふざけた言い方をしました。

『……用件を言って』

『ん、も。冷たいんだから。あの頃のように優しくして』

『早くして。電話切るわよ』

『そんなことしてみろ、そっちに暴れに行くぞ』

突然、豹ひょうへん変へんしました。

『どうぞ、ご勝手に。警察の厄介になるのが落ちよ。それでもいいならどうぞ』

『……お前、変わったな』

『変えたのは誰よ』

『ま、いいさ。今の幸せを続けたかったら、金を用意しろ』

案の定、金が目的でした。

『……いくら？』

金田とのかつことを主人に知られたくなかった私は、金田をそれ以上怒らせないために承諾しました。そして、日時を決めると、客の振りをしてくるよう頼みました。けど、知つてのとおり、金田は来ませんでした。——」

「なして、振り込みにせんかったと？」

「端はなから金をやるつもりはありません。一度金をやれば、一生せびり続けるのは目に見えています。話し合いで解決するつもりでした。」

もしも金田が納得しない場合は、離婚を覚悟の上で主人に打ち明け、恐喝きょうかくの現行犯で警察を呼ぶつもりでいました」

真実味を帯びた日斗美の供述ではあるが、藤堂には眉唾物だった。なぜなら、話の中に、あの廃屋が登場しなかったからだ。

日斗美は、金田が長崎の出身だと知っていたに違いない。それで、土地勘がある金田との待ち合わせ場所をあつた廃屋にした。土砂崩れを起こす地盤だと知った上で……。そして、台風が直撃することをニューズ等で事前に知っていた日斗美は、台風が上陸する×日を指定した。内容はこうだ。

『旅館の裏を下りたところにある廃屋で会いましょう。あそこなら誰にも見られないし、厨房の勝手口から近いから最短で行けるわ。雨が降ろうが槍が降ろうが、×日に必ず来て。じゃなければ金はやらないわ。後に脅迫しても無駄よ。主人と離婚して逃げるわ。そうなたら一文も入らないわよ』

それが、藤堂の推測だった。そして、予約人数を2名にしたのは、金田が待つ廃屋が倒壊しないケースも考え、どこの誰だか分からない架空の連れが、台風を利用して金田を崖から突き落として殺したというストーリーにするためだ。

「——金田が長崎の出身だと知ってましたよね」

「いいえ。九州の出身なのは方言で分かってましたが、長崎だとは知りませんでした。『長崎に行くなら観光スポットを案内したのに』と脅迫の電話があった時に言ったので、もしかしてとは思いましたが。もし最初から知ってたら、金田が戻ってくるかもしれない故郷ふるさとの長崎にわざわざ逃げてきませんわ。でしょ?」

日斗美は、征服感に浸るかのような眸ひとみで藤堂を見つめた。……この女は知能犯だ。藤堂は確信した。つまり、自分の手を汚さないで、台風という天災てんさいに金田を殺させたのだ。

結局、日斗美を逮捕することはできなかつた。澱おりが溜たまったままの藤堂は、胸糞むなくそが悪かつた。だが、物証がない以上、どうすることもできない。

【老舗旅館の美人女将】のテレビ出演が功を奏してか、〈静風〉は繁盛していた。日斗美の装いは、紹ろから裕あわせに変わり、萩をあしらった付け下げに銀色の帯をしていた。忙しそうに接客するその身のこなしは、老舗旅館に相応ふさわしい風格と共に、優美を兼ね備えていた。

様子を見に来た藤堂に気付いた日斗美は、清々しい笑みを湛たたえていた。その笑顔には、優越感と達成感を含んだ勝者の貫禄うかがが窺え、窓辺から漂う菊の香と溶け合っていた。――

完